様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３５３１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５５１１０１９

研究課題名（和文）シラク政権下の美術館構想－文化学の視点から

研究課題名（英文）The Museum Initiative under Jacques Chirac's Administration - a Culturological Perspective

研究代表者
松岡　智子（MATSUOKA, Tomoko）

倉敷芸術科学大学・芸術学部・教授

研究者番号：９０２７９０２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はフランスのジャック・シラク政権下における美術館構想について、よく知られたルーヴルの「パヴィヨン・ド・セッション」やケ・ブランリー美術館以外に、国立移民史博物館、ユダヤ芸術歴史博物館、ホロコースト記念館にも強く光をあてることにより、これらの美術館・博物館の設立が、常に歴史と向き合ったシラクの記憶の活動の一環であり、また、現代フランスの差し迫った課題に対する重要な政策であったことを明らかするものである。

研究成果の概要（英文）：This study discusses the art museum initiative under Jacques Chirac's administration, and aims at shedding new light on National Museum of Immigration History, Museum of Jewish Art and History, and The Shoah Memorial, in addition to the well-known Le Pavillon des Sessions at Louvre Museum and Quai Branly Museum. The study further clarifies that the establishment of these museums was not only part of the activities for cultural memorization led by Chirac, who has always reflected on historical issues directly, but also an important policy reflecting how pressing issues are addressed in modern France.

研究分野：博物館学

キーワード：ジャック・シラク　ケ・ブランリー　ルーヴル　移民史博物館　ユダヤ博物館　ヴェル・ディヴ

１．研究開始当初の背景

ドゴールからはじまりミッテラン大統領の時代に至るまでの博物館政策とは明確に一線を画しているフランスのジャック・シラク政権下の「多文化共存」重視の博物館構想について、これまではシラクの強力なイニシアティヴによって設立されたことで知られる、《非西洋》－アフリカ、アジア、オセアニア、アメリカ－の民族資料を展示するルーヴル美術館内の新ギャラリー「パヴィヨン・ド・セッション」(2000 年)とケ・ブランリー美術館(2006 年)が主に紹介されるだけであった。

ケ・ブランリー美術館を紹介した我が国の主な文献資料としては、雑誌『芸術新潮』(2007 年 3 月号)の特集記事が挙げられる。ここでは吉田憲司(国立民俗学博物館教授)が代表的な作品の解説と美術館誕生までの歴史を執筆し、川田順三は「失望と期待と－新博物館が提起するもの」と題するエッセイのなかで、人類学の視点から多文化の相互理解への困難さを指摘するという、厳しい見解を示しつつも企画や展示の斬新さを評価する。

また、2008 年 3 月 21 日から 22 日にかけて、全国美術館会議主宰により湘南国際村センターで第 3 回 21 世紀ミュージアム・サミットが開催され、基調講演者のジェルマン・ビアットが参加し、同美術館の紹介を行っている。以上のように我が国でも、ケ・ブランリー美術館を紹介する記事や講演なども開催されているが、本格的な学術研究対象にはなっていない。

また、国外を見ても、ケ・ブランリー美術館を扱った文献資料としては、収蔵品の写真と解説を掲載した作品集やガイドブック、展覧会図録、概説書以外に、ポストコロニアリズムの視点から同美術館について論じた、サリー・プライスの『パリ・プリミティヴ』(シカゴ大学出版、2007 年)がある。しかし、シラク政権下の複数の美術館・博物館を総合的な視点から分析した学術論文・学術書は見られない。

筆者は1987年から1989年にかけてパリのルーヴル学院で博物館学を学んだのち、日仏の美術館に関する研究を進めてきた。その成果として、パリ装飾美術館館長を務めたダニエル・ジロディ著・高階秀爾監修による訳書『美術館とは何か』(鹿島出版会、1993 年)を出版、その後、日本で最初の本格的な美術館である大原美術館の基礎的コレクションの収集を行った洋画家であり文化交流者でもあった児島虎次郎の研究によって、2004 年に東京大学より文学博士号を取得し、同年、科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の交付を受け、『児島虎次郎研究』(中央公論美術出版)を出版した。その後も、ミミ・ザイガー著の訳書『ニュー・ミュージアム－現代美術・博物館の旅』(鹿島出版会、2007 年)を出版、さらに、太田康人・水沢勉・渡辺真理・松岡智子による共編著書『美術館は生まれ変わる－21 世紀の現代美術館』(鹿島出版会、2008 年)を出版した。本書は欧米、アジアにおいて進行している新たな美術館をめぐる動向を調査、研究したものであり、筆者はルーヴル美術館とケ・ブランリー美術館についての歴史や時代背景を中心に論じた。

その後、2009 年より 2011 年の 3 年間、科学研究費補助金〔基盤研究(C)〕の交付を受け、「シラク政権下における美術館構想－ケ・ブランリー、ルーヴルを事例に」をテーマとする研究を行った。本研究で筆者はシラク政権時代に焦点をあて、ルーヴル美術館とケ・ブランリー美術館を中心とした美術館構想の分析を進めた結果、国内外でも本格的な研究対象なっていないパリの国立移民史博物館もまた、シラクの強いイニシアティヴによって作られたものであることが明らかとなったため、シラクの美術館構想の全体像を再構築しなければならないという大きな課題が残されたのである。

２．研究の目的

シラクのイニシアティヴによって構想された「パヴィヨン・ド・セッション」やケ・ブランリー美術館以外にも、彼がパリ市長時代から積極的に設立を支援していたユダヤ芸術歴史博物館(1998 年)や、ショア(注：ホロコーストのこと)記念館(2005 年)、そして、国立移民史博物館(2007 年)も研究対象とすべきであることが筆者の調査・研究により明らかとなった。

これらの博物館構想を通して、グローバリゼーションが進む 21 世紀において、ポストコロニアリズム、アイデンティティ、ミグレーション、ナショナリズムの視点もまじえ、「多文化共存」をどのように視覚化しているか、また、「他者」と向き合う現代フランスの諸問題についても明らかにすることを目的とする。また、パリのビッグ・ミュージアムの「分館」という、これまでには見られなかった新た形態の美術館であるルーヴル・ランス、ルーヴル・アブダビ、そして、ポンピドゥーセンター・メッスについても視野に入れる必要がある。

そして、以上のシラク政権下の美術館・博物館構想について総合的な考察を行うためには、文化学の視点から考察することが不可欠である。

３．研究の方法

東京を中心とした国内の図書館や大学、その他の研究機関で文献資料収集(特に国立国会図書館で『フィガロ』や『ル・モンド』紙を中心とした新聞・雑誌記事を検索)し、関連図書を購入する。また、国内の関係者への聞き取り調査を行う。

さらに、フランスの図書館(主に国立ミッテラン図書館)で、日本では入手しにくい文献資料を収集し、また、該当する美術館や博

物館を視察し収蔵品やそれらの展示方法、常設・企画展示についての調査を行い、館内の資料室で文献資料を収集し、専門家や関係者から聞き取り調査を試みる。
そして、研究成果を論文にまとめ学会発表を行うことにより、専門家からの意見を求める。

４．研究成果

（１）2013(平成 25)年度

2013年3月にフランスとスペインに出張し、その前後の期間に収集した文献資料により調査・研究を行った結果、シラク政権の時代、ビッグ・ミュージアムの「分館」という、これまでにはなかった新たな形態の美術館構想が進められていたことが明らかとなった。
その１つは、フランス北東部のロレーヌ地域圏モーゼル県メッス市のポンピドゥーセンター・メッス(2010 年開設)であり、もう１つは、北部のノール＝パ・ド・カレ地域圏パ・ド・カレ県ランス市のルーヴル・ランス(2011 年開設)である。そして、いずれも世界的に著名な日本人建築家の設計によるものであることから(前者は坂茂であり、後者は SANAA)、我が国でも注目を集めている。そして、以上の美術館誕生に大きな影響を与えたのが、1992 年に開館したスペインのソロモン・R・グッゲンハイム美術館ビルバオ分館である。
ポンピドゥーセンター・メッスとルーヴル・ランスは、2003 年から本格的に着手したシラク政権下の脱中央集権政策の一環として、スペインの「ビルバオ効果」に刺激を受け、疲弊した地方経済をパリのビッグ・ミュージアムの「ブランド」力を起爆剤にして活性化させようとする、各々の地域圏や地方自治体の強い要望により実現した。そして、しばしば「マクドナリセーション」と揶揄させるように、独自のコレクションをもたず、単なるフランチャイズ・チェーンと批判されるグッゲンハイム財団の分館システムとは異なる、「アンチ・ビルバオ」を目指す。具体的には周囲の景観や利用者とのバリアフリー化、これまでにない作品の展示方法や企画展の内容への試み、また、地域や近隣国の美術館、学校とのネットワーク作りにも積極的に取り組もうとしている。
政治的な背景も無視できない。ポンピドゥーセンター・メッス創立の中心者であった右派のジャン＝ジャック・エラゴンはシラク政権下の文化大臣であり、メッスは彼の生まれ故郷であったことから、地元への利益誘導としての誘致であったとも考えられる。また、ルーヴル・ランス設立に関しても、伝統的に強固な左派の地盤であったランスから、与党国民連合(UMP)の票を獲得するため、言い換えれば、常に選挙で敗北してきた右派の票獲得のためのという見方もある。
そして、グッゲンハイム美術館同様、ルーヴルももはやフランス国内にとどまらない。アラブ首長国連邦(UAE)アブダビ首長国は 2012 年 1 月 25 日、同首長国の沖合サルディヤト島に、ルーヴル美術館の分館(ルーヴル・アブダビ)を 2015 年に開館すると発表した。ルーヴル・アブダビのプロジェクトもまた、シラク政権下において進められていたもので、左派は棄権したが、UMP を中心に支持をとりつけ、2007 年 3 月 6 日、両国間で契約が調印された。
以上のことから、シラク政権下の美術館構想のキーワードのひとつに「越境」を挙げることができ、これらの調査・研究の成果を論文「越境する美術館－ポンピドゥーセンター・メッスとルーヴル・ランス」にまとめた。

（２）2014(平成 26)年度

2014 年 3 月、パリでの調査により、シラク政権下の美術館構想として、新たにパリのショア記念館を加えることにし、フランスで収集した資料と同記念館での調査、そして、その後、東京の国立国会図書館で行った、フランスの新聞記事を中心とした資料収集に基づき、同記念館の概要や設立経緯およびシラクとの関係を中心に考察を行った。その契機となったのは、ショア記念館の礼拝堂の入り口に掲示した解説パネルに書かれた「1995 年 7 月 16 日、50 年間の沈黙と忘却ののち、ジャック・シラク大統領が演説のなかで、第二次世界大戦中、フランスに在住していたユダヤ人に対して、ドイツ占領軍が行った犯罪に、ヴィシー政権が加担したことを正式に認めた」との記述を発見したことによる。
以上の調査結果の一部を、筆者は論文「記憶の場所－ショア記念館(パリ)を中心として」にまとめ、〔付録〕として、これまで我が国では紹介されることのなかった同記念館開館式におけるシラクの演説の全文を邦訳し、掲載した。そして、2015 年 1 月 31 日(土)に京都文化博物館で開催された第 4 回明治美術学会例会で、「近代美術と博物館」と題し、多文化主義へと移行してゆくシラク政権下の美術館・博物館と大正期に起工した明治神宮聖徳記念絵画館を事例に挙げ、国民国家成熟期のフランスと草創期の日本の博物館を比較検討する研究発表を行った。
しかしながら、2015 年 1 月と 11 月にパリで同時テロが勃発したため、当初計画していたフランスの美術館・博物館での調査と関係者からの聞き取り調査をやむなく取りやめにせざるを得なかった。

（３）2015(平成 27)年度

調査・研究のため 2016 年 3 月パリとオルレアンに出張し、京都ノートルダム名誉教授の野田四郎氏に通訳とコーディネーターを依頼し、次の関係者との面談を行った。
① ショア記念館国際関係担当局長のブルーノ・ボワイエ氏
② フランス被追放ユダヤ人子息子女協会

会長のセルジュ・クラルスフェルト氏
③ ユダヤ芸術歴史博物館館長のポール・サルモナ氏
④ 国立移民史博物館研究課長のマリアンヌ・アマール氏
⑤ オルレアンのヴェル・ディヴ子供博物館会長のエレーヌ・ムシャール・ザイ氏および館長のナタリー・グルノン氏

以上の方々から貴重な情報を入手できたことは大きな成果であった。

この研究については、当初ルーヴル美術館とケ・ブランリー美術館から開始したが、今回の調査により、2003 年に本格化した国立移民史博物館構想もシラクを中心に計画されていたことが明らかとなり、研究対象に入れるべきであることが明確となった。

また、ユダヤ芸術歴史博物館に関しても、シラクが首相時代からジャック・ラング文化相とともに、設立に向けて積極的に支援を行っていたことが明らかとなった。そして、2005 年のショア記念館開館に向けて中心的な役割を果たした歴史家・弁護士のセルジュ・クラルスフェルト氏には、来年度出版予定の訳書『ジャック・シラクの演説・メッセージ』集の序文執筆を承諾していただいた。同氏は、シラクが 1995 年の演説のなかで、第二次世界大戦中、ヴィシー政権がユダヤ人の強制移送に積極的な役割を果たした事実を、大統領として初めて認めたことを高く評価していた。

クラルスフェルト氏が編纂し、この歴史的な演説が含まれた『ジャック・シラクの演説・メッセージ』集は一般の書店で販売されておらず、前年にショア記念館で筆者が発見したものであり、表紙には「ドイツ占領軍へのヴィシー政権の協力により、犠牲となったフランスのユダヤ人に敬意を表して　『在仏ユダヤ系団体代表協議会』(CRIF)、フランスの『諸国民の中の正義の人』に敬意を表してそして、ショアの記憶のために」と記されている。この演説集は 1986 年から 2007 年にかけての 13 篇のシラクの演説とメッセージが含まれており、アルフレッド・ドレフュス大尉とエミール・ゾラの子孫に宛てた親書や、ショア記念館開館式やアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所での演説もあり、それらの内容はほとんど我が国では紹介されておらず、フランス現代史においても貴重な一次資料である。

翻訳作業は筆者と野田氏が担当し、我が国のフランスのホロコースト研究の第一人者である奈良女子大学教授の渡辺和行氏にご指導をいただき筆者が注を付し監訳者となっている。また、同氏には序論執筆も依頼している。

さらに、大統領退任後もシラクが 2011 年 1 月、ヴェル・ディヴ子供博物館開館式に、ホロコースト財団理事長を務めたシモーヌ・ヴェイユ氏と出席した事実を同博物館と新聞記事で確認した。

以上の調査・研究から、これらの博物館設立構想が、「光であっても闇であっても国の歴史と向き合うことは、未来と向き合うことに等しい」という明確な論理を持ち続けたシラクの記憶の活動の一環と捉えることができる。

フランスにおいて、国家による文化政策が本格化するのは、ドゴールにより 1959 年、文化大臣に任命されたアンドレ・マルローからである。マルローは「文化の民主化」を目指し、フランス国民が平等に享受できるように、全国に文化会館(通称「文化の家」)の建設を推進した。また、1950 年代、作家でもあった彼は『芸術の心理』や『空想美術館』など芸術に関する著作を発表し、日本文化にも深く親しみ、1974 年には日本を訪れている。続いてジョルジュ・ポンピドゥーが政権をにぎると、「あらゆる人々のための芸術と文化」を目指し、様々な形の現代文化や創作活動をパリの一か所に集めようとしてジョルジュ・ポンピドゥー国立芸術センターを 1969 年に計画し、1977 年に開館した。小学校教員の家に生まれ、高校教師も務めたこともあるポンピドゥーは豊かな教養をもち、現代美術の収集家でもあり、また、『フランス名詩選』の著者でもあった。

さらに 1974 年、シラクを首相に任命した大統領ヴァレリー・ジスカールデスタンは、名門の出身で ENA を卒業した秀才であり、18 世紀の家具・調度や歴史に造詣が深く、オルセー美術館を設立する計画をたてるが、財政難が原因で実現することはできなかった。

その後、社会主義政権を確立したフランソワ・ミッテラン大統領も歴史に造詣が深く、文化大臣にジャック・ラングを起用しルーヴル美術館大改造をはじめ、パリのアルシュ(新凱旋門)、オルセー美術館、新オペラ座などの文化的建造物、さらには国立ミッテラン図書館、アラブ世界研究所をも設立するなど、国家予算の 1%近くもの文化予算を用い大規模な文化政策を行っている。

このように第５共和制時代になると、歴代の大統領は積極的に文化政策を行い、ドゴール以降、追求し続けた「フランスの栄光」の象徴として、国家的記念碑を建設してきた。今後は、このような系譜のなかで、美術館・博物館を含めたシラクの文化政策が目指したものについて、さらに研究を推進してゆく。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3　件）

・<u>松岡智子</u>「越境する美術館－ポンピドゥーセンター・メッスとルーヴル・ランス」(『倉敷芸術科学大学紀要　第 19 号』)　27～40 頁　2014 年 3 月

・松岡智子「記憶の場所－ショア記念館(パリ)を中心として」(『倉敷芸術科学大学紀要第 20 号』)　23～36 頁　2015 年 3 月
・松岡智子「近代美術と博物館」(『近代画説第 24 号』)　140～142 頁　2015 年 12 月

〔学会発表〕（計　1　件）
・松岡智子「近代美術と博物館」(会場：京都文化博物館　住所：京都府京都市中京区三条高倉）明治美術学会主催　2015 年 1 月 31 日
〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
松岡　智子（MATSUOKA Tomoko）
（倉敷芸術科学大学・芸術学部・教授）
研究者番号：
９０２７９０２６
(2)研究分担者
（無　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（無　）

研究者番号：